

ある。

最後にセンター長藤原教授の閉会の辞があって

午後5時30分散会した。

数理解析研究所図書室 中 司 里 美

7月12日東京大学において開かれた標記のシンポジウムは、特定研究「大学図書館における情報処理トータルシステムの開発」の報告4件と、フォーラム「これからの大学図書館」というプログラムであった。理解の届かない部分もあったが、プログラムに沿って、印象、感想などを述べる。

特定研究は昭和53年度より2か年にわたり、3班に分かれて行なわれたものである。当日配布の要項によると、第1班は図書館業務自体、第2班は学術情報のうちモノグラフ、第3班は逐次刊行物、をそれぞれ研究対象としている。午前中の2つの報告—柴田正美「学術雑誌総合目録 人文・社会科学欧文編データベース」と根岸正光「学術雑誌総合目録システム」—はその第3班の報告であるが、第1班の報告「大学図書館業務処理システム」が、井上如講師の言葉によれば、「デスクリプティブというよりはプレスクリプティブ」であったのとは対照的に、非常にデスクリプティブであり、柴田講師の、印刷刊行をま近に控えての「学総目」についての報告は臨場感があった。作成の経過、取り扱ったデータの量など、数字と共に説明があり、「相互協力に役立つファインディングリスト」という学総目の機能上の位置づけによる具体的な編集方針が、OHPを使って実例と共に示された。ISSNを項目として加えた理由に、完全な書誌データの作成は困難という判断があるとのことであった。自分達の日常作る書誌データは、全体からみれば1つの例なのだと意識する必要があるとあらためて感じた。

根岸講師の報告は、学総目データベースの研究として、略誌名の自動生成と検索実験、オンラインによる校正システム、学総目処理システムのための現状分析と規模推計などであった。報告は詳細で、又いかにも客観的であり、たとえば略誌名の自動生成の説明における如く、目の前の材料を、視点を定めて類型化し、処理を経て、結果を呈示する過程が明快であった。

午後の津田良成講師「MARC利用システム」は特定研究第2班の報告である。MARCについての研究報告は、昨年の第1回夏期シンポジウムでかなり多角度から行なわれており、今回の報告は、筑波大IDEAS/77による、公衆回線を使っているLC-MARCオンライン検索実験結果についてであった。実験評価によると、データベース自体の構造内容、検索システムにおけるデータベースの取扱い方法、さらに実際の端末操作の場面、等の各段階で様々な問題があったようである。研究報告の最後、井上如講師の「大学図書館業務処理システム」では、機械化の足どりをたどり、環境の変化の説明を経て、端末館、地域センター、全国センターを要素とする壮大なネットワークのイメージスケッチが呈示された。詳しくは要項に説明を譲るとして、ここでは「前置き」として話されたことを書きとめておく。今、我々図書館員が気づかなければならないこととして3点があげられた。1つは図書館の仕事が写本時代の書誌学の伝統から抜けきれず、特に書誌記述の統一の点で遅れているということ、次に図書館は目録カードではなく、データを扱っていることに気づくべきであるということ、最後に Resource Sharing とは今や、1次文献のみを対象とするものではなく、広く人間、手段、経験をもその中に含めて考える方がよいということであった。

プログラム最後のフォーラムは雨森弘行、桜井宣隆、松村多美子、山本毅雄の各講師がそれぞれの立場から「これからの大学図書館」を論じ、質疑応答が行なわれた。状況は急速に変化していることが、指摘された。

1日のシンポジウムであったが、来たるべきトータルシステム、ネットワークの中で身動きできなくなるのではなく、今までになかった自由を獲得できるよう、毎日の仕事の意味を考えるきっかけにしたい。